

ムカシの競馬を読む

平成9年・東京競馬場
フェブラリーコンペティション
優勝馬：サンライズバッカス

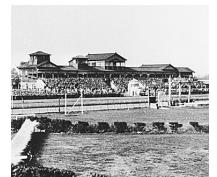
© JRA



第137回 10年・20年・30年前の2月



ムカシの競馬を読む



須田鷹雄 すだたかお

1970年東京生まれ。競馬ライター。サラブレーダー、大阪日刊スポーツなど各種媒体に寄稿中。

2月といふと、サンライズバッカスがフェブラリーコンペティションを制した月ということになる。

2月19日付の中日スポーツによると、オーナーの松岡隆雄氏はこれがG1初制覇。父の松岡重雄氏は中央競馬会ができた昭和29年から馬主だったそうだが、親子二代50年でついに獲得したG1タイトルだったそうだ。

さらに、この勝利は生産者のヤナガワ牧場に於てもはじめてのJRA G1優勝だった。同じ記事によると、この時点ではヤナガワ牧場は開業から42年。その後、パノリチャード、コパノリッキー、キタサンブルックを生産していまをときめくヤナガワ牧場だが、G1シーンでの大活躍はここ10年のことといふことになる。

この平成19年2月は、ある騎手がJRAの騎手試験に合格した月である。2月16日付のサンスポから引用しよう。

「初めての試験種付けをした」
「ラムタラはすでに1シーズン、英
国で種牡馬生活を送つてから輸入
されており、経験は豊富。この日も
スマーズに種付けを追え、見守った
関係者をホッとさせた」

日本における初年度の種付けな
のに、この記事にある「初産駒が誕
生したばかりの」とはどういうこと
か。今度は2月7日付の日刊スポーツ
から引用しよう。

「約45億円の種牡馬シンジケート
が組まれたラムタラの産駒が、4日
夜に北海道早来町のノーザンファ
ームで誕生したことが6日、分かつ
た。ラムタラは昨春は英國で種付
けを行つており、日本で生まれた産
駒の第一号（以下略）」

そう。持込馬がひとと誕生したわけである。この馬（母ジャドウオル）は残念ながら未勝利だったが、ラムタラの持込馬・マル外といふのは10頭が血統登録され5頭が勝ち上がり。マル外のイングランドシチーはオーブンも勝っている秀だつた。

平成も9年目なのにまだ物騒だつたんだな、と思われるのが次の出来事。2月12日付のデイリースポーツから。

「11日の大井競馬4日目、第7R 発売中の午後1時55分ごろ、コン

チーロッパの平地シーズンがオフの
世界の名手、キャッシュ・アスマツセ
ンが日本で腰を据えて騎乗する。
ヨーロッパの平地シーズンがオフのサ

「48歳の新人騎手が誕生する。安藤光彰騎手に吉報が届いた。地元笠松での記者会見で、「素直に嬉しい。家族みんなで喜んでる」と心境を率直に打ち明けた」

JRAへの転進は2歳年下の安藤勝己騎手の活躍に刺激されたからではない。笠松競馬の存続が危ぶまれ来年以降の開催はまだ不透明。いつ廃止に追い込まれてもおかしくない状況となり一大決心をした（以下略）」

いまから10年前といえば、地方競馬の経営危機がいちばん深刻だった時代、48歳でも中央への転進をはかりたかったのは当然のことではある。とはいっても、48歳はやはり異例といえれば異例。こうして振り返ると、アンミツさんは浜中、丸田、荻野琢、藤岡の各騎手と「同期」だったということになる。

安藤光彰騎手はこの転進から平成24年の引退までにJRAで56勝。中央の騎手になってから重賞は

勝てなかつたが（笠松時代に中央重賞を2勝している）、レースでの獲得賞金は1億5000万円以上となつた。笠松ではどうやつても叩き出せない金額。やはり転進は成功だつた。

残念ながら先日死亡してしまつた白毛の誘導馬、ホワイトベッセルのデビュー（もちろん競走馬として）も、いまから10年前のことだ。平成19年2月19日付の日刊スポーツから引用しよう。

「京都競馬第5Rの新馬戦に関西では初となる白毛馬のホワイトベッセル（牡、安田隆）がデビューし3着と健闘した。真っ白の馬体はパドックから異彩を放ち、同馬を引く佐藤助手も馬に合わせヘルメット、眼鏡のフレーム、ジャンパー、ズボン、靴まで白で統一。安田隆師は『せうかくだし、ファンの方に喜んでもらおうと考えた』とサービス精神をのぞかせた（以下略）」

この時点で白毛馬の中央最高

勝てなかつたが（笠松時代に中央重賞を2勝している）、レースでの獲得賞金は1億5000万円以上となつた。笠松ではどうやつても叩き出せない金額。やはり転進は成功だつた。

この直後の4月1日、阪神の未勝利戦で初勝利をあげることとなる。

期待にこたえ、ホワイトベッセルは

9年間の2月といふと、大井競馬で白

毛のハクホウクンがデビューした月

（そのデビュー戦は8着、後に大井

9年の2月といふと、まずこの二

ユースを。本欄でも何回か扱つたラ

ムタラについて、平成9年2月8日付のサンスポから。

「奇跡の名馬が、模擬試験で模範解答だ！」つい先日、初産駒が誕生したばかりのラムタラが7日、繫養先のアロースタッドで来日以降

いるのはちょうど面白い。

そんな20年前からは、まずこの二

ユースを。本欄でも何回か扱つたラ

ムタラについて、平成9年2月8日付のサンスポから。

「奇跡の名馬が、模擬試験で模範解答だ！」つい先日、初産駒が誕生したばかりのラムタラが7日、繫

養先のアロースタッドで来日以降

ピューターの投票システム計算機に障害が発生、7R以降が中止打ち切りになるアクシデントがあつた（中略）1時間以上待たされたあげくの中止打ち切り。納得できな

いファンが東京都馬主会館玄関前に押し寄せ、窓ガラスを割るなど一時騒然となる場面もあつたが、駐車場、指定席券の全額払い戻し、および退場時の無料入場券配布で、ぶしぶしぬ得。隣の平和島競艇場で関東地区選手権の優勝戦が行われていたため、あきらめて平和島へ流れたファンが約5千人。平和島主催者の見込みより7千万円ほど売り上げも多かつた

大井競馬場の事務所は「コトナ一側にあるのだが、そことは知らぬい不満分子が事務所つぽい作りの馬主会館につめかけたようであ、暴徒は約250人、対峙した警官隊は約100人というから騒擾と今までいかなくともなかなか不穏な話である。LIVINGができる以前はいかなくともなかなか不穏な話である。LIVINGができる以後の大井しか知らないファンには想像し難いかもしれない。

最後にいまから30年前、昭和62年の2月から。私も知らなかつたこんな記事があった。2月3日付のサンスポより。

「世界の名手、キャッシュ・アスマツセンが日本で腰を据えて騎乗する。ヨーロッパの平地シーズンがオフのサ

同じ日の報知新聞は当時のJRA審判部長や広報室長のコメントも紹介しており、その内容も前向き。そんな空気もあってサンスポも「騎乗する」という表現を使っていたのだと思うが、結果としてはいたい短期免許が実現しなかつたのは皆さん御存知の通りである。

ただ、この昭和62年は不幸中の幸いというか、ワールドスープーリヨンキーズシリーズが創設された年でもあった。記念すべき第1回にアスマツセン騎手は参加し、2,6,1,3着と対象4レース中3レースで馬券に絡む活躍を見せて、優勝をもぎとつている。